

# 1 2 文章の書き出しにおいて見られる工夫についての考察

～人を惹きつける文章の書き出し～

**要旨** 書き出しとは文章の顔である。しかし、多くの人にとって魅力的な書き出しを書く事は難しい。そこで書き出し小説大賞や本屋大賞の受賞作の分析を通して、よりよい書き出しの書き方を研究した。その結果、よい書き出しは簡潔で、読者に驚きや想像の余地を与えることが重要だということが分かった。今後はアンケートをとって研究をより確実なものにしていくつもりだ。

**Abstract** The beginning sections is the face of sentence. However, it is difficult to write fascinating sentences. Therefore, we researched the way to write better opening sentences. As a result, we found out better opening sentences is short and giving us the margin to imagine or surprise.

## 1 研究背景と研究目的・意義

### 1.1 研究背景

書き出しとは文章の顔である。書き出しはそれ自体が読者に感動を与えるだけでなく、読者の興味を促したり、後の文章の伏線となったりと文章全体において重要な役割を担っている。

しかし、多くの人が文章を書くとき、書き出しに何も工夫を施さずに印象の薄い文章になってしまったり、工夫を凝らしてみようと考えたとしても、何をしたいかわからなくなったりしている。

### 1.2 リサーチクエストと先行研究・事例

文章の書き出しは個人によって感じ方が変わるため、良し悪しを判断する基準を設けることにした。調べてみると、インターネット上に文章の書き出しのみを対象にした、コンテストがあった。

よって、リサーチクエストは、「書き出しコンテストで受賞できる作品はどのようなものだろう。」となった。

先行研究として、とある作者の作品に焦点をあてた書き出しについての研究はあったものの、幅広い文学的文章を対象にしたようなものは少なく、また、書き方についての記述があるものは見当たらなかった。書き出しを読む際に感動を引き起こす要素は何かということを考える際に、参考になる論文もあった。

### 1.3 研究の目的・意義

多くの人が苦しむ書き出しを研究することで文章を書くとき止まらず書き進められるようにする。また書き出しで止まらないことで文章を書く楽しさを知ってもらいたい。

### 1.4 仮説とその根拠

「会話文から始まる書き出しがよい」という仮説を立てた。主に読書感想文などでは、主人公のセリフや自分の会話文などセリフから始めるのがよいといわれる傾向にある。また冒頭いきなりセリフから始まる文章は興味が惹かれるだろうという主観を根拠としている。

## 2 研究方法1 「書き出し小説大賞」への応募

### 2.1 研究の目的とリサーチクエスト・仮説との関係

「書き出し小説大賞」に応募した理由は、自分たちが書いてみた文章の良し悪しを、客観的かつある程度目の肥えた人に判断してほしいからである。他の書きだしコンテストに関しては、開催頻度があまりにも低い、開催予定が未定などの理由から断念した。

### 2.2 研究と分析方法

書き出し小説大賞とは東急メディア・コミュニケーションズが運営するデイリーポータルZのコンテンツを指す。これは月に一度モチーフが提示され、そのモチーフを元に続きが読みたくなるような書き

出しを書く、というコンテストである。このコンテストに応募し、入賞を目指す。

分析方法としては入賞した要因または入賞できなかった要因をコンテスト全体の傾向と照らし合わせる。

分析観点は仮説で考えた通り、会話文は多いのか、またどのようなものか、多い作風は何か、文字数はどのくらいかである。

## 2.3 結果

一度目の募集の時に過去のコンテスト受賞作を見た時点で、初めの仮説、「会話文から始まる書き出しがよい」は、ずれているということが分かった。コンテスト受賞作に会話文はほとんどなかった。受賞作の雰囲気は、見た瞬間笑えるネタ作品や、なんかいいなと感じるいわゆる「エモい」作品、背筋の凍るような怖い作品の3つにわけることができ、回によって人気なものは違った。

第281回から第291回までの11回応募し、10作品入賞することができた。

以下、応募結果である。

回	テーマ	作品/結果	雰囲気
281	雨	「いい女」になるために私は傘を閉じた	エモい
282	怪談	お湯を入れて2分。我慢できなくなった僕はインスタント人間のフタをめくってしまった	怖い ネタ
283	ガムテープ	ガムテープの香りは高2の文化祭を思い出させる。	えもい 怖い ネタ
		絶え間無く襲ってくる後悔を今日も段ボールにしまってガムテープで閉じる。	同上
284	〇〇おじさん	入賞せず (バイトしている焼き肉屋には毎週水曜日、りんごジュースおじさんが来店する。) (「JKおじさんの恋愛相談配信って知ってる?」) (週末になると私のなかのおじさんがうずきだす。)	ネタ
285	不条理	入賞せず (洗面所からラーメンのにおいがする。) (一年に一度しか会えないのに何で毎回雨なんだ。) (かかとの穴を塞いだ翌日に薬指に穴が空いた。)	ネタ エモい
286	触感	裸足で歩く雪原は燃えている	ネタ エモい
287	好き	今日はおはようが言えた。心臓がありえないくらいドキドキしている。	エモい
		缶を叩けばコツンと鳴る指先で、未練を断ち切るためにギターを鳴らす。Fコードには君がいる。	同上
288	名人/達人	「ゆうちゃんはままをえがおにするめいじんだね！」私は今でもこの言葉に縛られたまま動けない。	ネタ エモい
289	拷問	恋も拷問も、やることは同じ。欲しい言葉を引き出すだけだ。	ネタ 怖い

290	美味し そう	最終選考通過 (ついさっき命を懸けて戦った相手を刺身にして食らう。) (祖母のキッチンでする味見が好き。キッチンも、祖母も、もういないけど。) (開けた蓋から溢れる湯気。モヤ越しに見える君の微笑み。)	エモい ネタ
291	大谷	大谷はそういう奴だった。小さな嘘を重ねて、笑みを張りつけて、人に嫌われないよう取り繕うような、そんな奴。	ネタ

以下入賞できた時の分析結果である。

【「いい女」になるために私は傘を閉じた。】

この時のテーマは雨だった。傾向としては雨の持つ重い憂鬱さを取り込んだ作品が多かった。

この時は初めての作品応募だったので、作者の目に留まるような奇抜なものを目指した。水に関連する単語で、「水も滴るいい女」という言葉がある。それは水に濡れたからいい女になるということであり、それを敢えて逆に捉えていい女になるために傘を閉じるという発想が目新しい。また、どうしていい女になろうと思ったのか、と読者に想像の余地を残しているという点が選考者に刺さったのではないかと分析した。

【お湯を入れて2分。我慢できなくなった僕はインスタント人間のフタをめくってしまった】

この時のテーマは「怪談」であった。審査員からは「孵化しかけた卵みたいな！ キモい！」というコメントがあった。作者はそんなつもりはなかったので誤算ではあったが、インパクトが強かったと推測する。この回はお化けや妖怪を出すなどのメジャーな怪談は少なく、日常の延長線上に起こりうる出来事について書かれたものが多かった。ただ普通の怪談を書いたところで、インパクトは足りないだろう。ただし、日常から外れすぎても理解の範疇を越えるのでよろしくない。恐らく審査員は現実でありそうでないくらいの出来事に関する描写を好んで選んでいる。

【ガムテープの香りは高2の文化祭を思い出させる。】

この時のテーマは「ガムテープ」だった。傾向としてはネタ系が多く特にシュールなものが多かった。また雰囲気のある「エモい」作品や、ガムテープの使い方が怖いものもあり、いろいろな作風のもものが混ざった回だった。選考者は自分より年上なので高校生の時の話は刺さるだろうと推測して書いた。選考者からは「思い出すなあ……ガムテとダンボールのおぼけ屋敷。」というコメントを貰い、しっかり刺さっていて狙い通りの結果である。

【絶え間無く襲ってくる後悔を今日も段ボールにしまってガムテープで閉じる。】

作品のテーマは上と同じくガムテープである。この回は怖い作品が主流と予測して書いた。ガムテープの機能に注目したものを書こうと考えた。ここで課題だったのは何を段ボールに入れるのかであって、気持ちをそのまま書いて入れるのは芸がないと思ったものの、ただ物を入れても限界があると考えたので物でないものを入れた。恐らくその意図が選考者に伝わったのではないだろうか。

【裸足で歩く雪原は燃えている。】

この時のテーマは「触感」だった。「雪原を灼熱にするコントラストが見事！」というコメントを選考者からのコメントがあった。雪原という冷たいものを逆に燃えているという熱い印象のある言葉で言い表したいという意図がよくつたわった。また、余計なことは書かず短く率直に表現した点もよかったのだと思う。

【今日はおはようが言えた。心臓がありえないくらいドキドキしている。】

【缶を叩けばコツンと鳴る指先で、未練を断ち切るためにギターを鳴らす。Fコードには君がいる。】

この時のテーマは「好き」だった。受賞傾向としては甘酸っぱい好きや親愛の感情からの好きなど読むといいなあという感情に包まれるものが多かった。審査員からは上の作品について「直球が刺さる例。」というコメントがあった。上の作品は恋愛したことある人なら一度は感じるだろう感情を書いたことがよかったのだろうと推測する。誰もが共感しやすいのだと考えられる。下の作品は「好き」が終わった後のことを書いている。甘酸っぱい好きが多い中ちょっと闇を感じる作品は目に留まったのではないかと推測した。選考者から「長文の書き出しは逆に難しかったりするんだけど、上記の作品群はどれも情感をキープしながらその世界へと導いてくれている。」というコメントを貰った。今までの傾向として短いものが好まれていたので長文はどうなるのか試した結果このようなコメントを貰えた。長文だからこそしっかり考えれば作品の世界に引き込みやすいように感じる。

【「ゆうちゃんはママをえがおにするめいじんだね！」私は今でもこの言葉に縛られたまま動けない。】

この時のテーマは「名人/達人」だった。受賞作の傾向としてはどんな名人/達人なのか説明的なものが多く長文の作品が多かった。またどれだけ面白い名人/達人を作るかが受賞のポイントだったように感じる。中には情趣を感じる作品もあった。その中で一文目は親子のほっこりする場面だが二文目ではなにか闇を感じるような描写であるこの文章はインパクトがあったのではないかと推測する。

【恋も拷問も、やることは同じ。欲しい言葉を引き出すだけだ。】

この時のテーマは「拷問」だった。推測した通り、受賞作は血まみれのグロテスクなものか大喜利のようなネタ系が多かった。この作品は一見なんの関係性のない恋と拷問の共通点を書いたことで読者に新しい視点を与える可能性がある作品といえる。選考者から「うまいことまとめられた！（笑）」というコメントを貰え、うまいこと言えた作品だと思う。ただこの後物語が続くかは微妙な作品である。この一文で完結したほうが綺麗なように感じる。

【大谷はそういう奴だった。小さな嘘を重ねて、笑みを張りつけて、人に嫌われないよう取り繕うような、そんな奴。】

この時のテーマは「大谷」だった。大谷といわれて誰もが思い浮かべるのはプロ野球選手の大谷翔平選手だろう。実際、受賞作の多くが大谷選手関連のものが多かった。そこで逆に大谷選手から遠く離れた作品なら多くの作品に埋もれず目を引くものになるのではないかと推測した。選考者から「もっとも大谷イメージから離れた作品でした。」というコメントも貰え、狙い通りだったといえる。

また「だった。」と過去形にすることで今は違うのかという興味を引く文章になっている。

以下入賞できなかった時の分析結果である。

### 不条理

この時は、不条理というワードからどんな作品が想定されているのかを推測することが非常に難しかった。受賞作の傾向としては、この後の展開が見込めない出オチ作品が多かった。とにかく面白いものを持ってきた人が受賞していた。書く人の引き出しの多さの勝負だった。文は短いものが多く、独白、人物紹介が多いと感じた。ただ、中には長めの風景描写によって文全体に雰囲気をもとわせた文があった。風景描写は難易度が高く、課題でもあるため参考にすべきと考えた。

### 〇〇おじさん

このときはとにかく短く、〇〇おじさんがいる、のような形式のものが多かった。

一番短いものは10文字で一番長いものは101文字であった。

書き出しというよりは一文完結のような出オチ感が強いものが多かった。またどの作品もひねり出した感があり、面白さに振り切ったネタ系の作品が多かった。ほぼ大喜利である。

このことより落選理由としては文が長く説明的であったこと、インパクトのあるおじさんを書けなかったこと、考え込みすぎて振り切ったおもしろみのない作品になったことが挙げられる。

美味しそう

このときも短いものが多かった。また 10 文字くらいの短文を 2, 3 文続けるような形式のものも多くあった。内容としてはテーマ通りの読んだだけで美味しそうと思わされる作品が多くを占めている。中にはよくわからない比喩が用いられた作品やネタ作品、正常な人間ならおいしそうとは思わないものを書いているものもあった。

今回は最終選考まで残ったので、落選理由としてはあと一押しが足りなかったのだと思う。おいしそうな描写が足りないか、面白みがないか、自分の世界に入りすぎて理解されないか、だと推測した。

## 2.4 考察

コンテストの受賞作品の中には意表を突くような物や人物が多かったが、そういった書き出しは多く、また発想力にも限界があるため、ほかの人よりも突飛な良い作品を作ることは大変だと感じる。

そこで切り取り方を工夫することが受賞作品のポイントではないかと推測した。受賞例からわかるように例えば言葉を反対の意味でとらえる、反対の意味の言葉を組み合わせるなど。

また探究を始める前に多いと推測していた会話文の書き出しはほとんどなかった。

## 3 研究方法2 本屋大賞受賞作品の分析

### 3.1 研究の目的とリサーチクエスチョン・仮説との関係

本屋大賞受賞作品の分析をする目的は文章の中での書き出しを研究するためである。研究1では書き出しだけに焦点を当てて研究してきた。しかし文章は書き出しで終わることはほとんどない。書き出しの後にも長く文章を続けなければならない物語において、どのような書き出しがあるのか研究すべきだと判断した。分析対象を本屋大賞の作品とした理由は、多くの人が親しみを持って読みやすいかつ、ある程度の質が保証されている本が揃っていると考えたからである。

### 3.2 研究と分析方法

本屋大賞とは全国の書店員が選ぶ「売りたい本」を決める文学賞を指す。そのため本に親しみのない人でも比較的読みやすいようなエンタメ的な作品がノミネートされる。2014年から2024年までの本屋大賞を受賞した10作品をジャンルに分けた。ジャンル分類は常識提示、風景、衝撃、セリフである。

### 3.3 結果

こちらも読者の意表を突くということが大切だと感じた。

以下作品である。

年数	作家名	タイトル	書き出し	ジャンル分け
2014	和田竜	村上海賊の娘	はじめ、「大坂」と表記されていたこの地が、いつごろから現在、使われている「大阪」の文字を宛てるようになったのかは判然としない。	常識提示
2015	上橋菜穂子	鹿の王	「お祖父さま！」哀しげな声をあげて、少年が部屋にかけこんできた。	セリフ
2016	宮下奈都	羊と鋼の森	森の匂いがした。	風景
2017	恩田陸	蜜蜂と遠雷	いつの記憶なのかは分からない。けれど、それがまだ歩き出したばかりの、	セリフ

			ほんの幼い頃であることは確かだ。	
2018	辻村深月	かがみの孤城	たとえば、夢見る時がある。	セリフ
2019	瀬尾まいこ	そして、バトン は渡された	困った。全然不幸ではないのだ。	衝撃
2020	凧良ゆう	流浪の月	休日のファミリーレストランは混んでいる。	常識提示 風景
2021	町田そのこ	52ヘルツのクジラ	明日の天気を訊くような軽い感じで、風俗やってたの？と言われた。	セリフ
2022	逢坂冬馬	同志少女よ、敵を撃て	薪割りの音が、春の訪れを告げる暁鐘のように、小さな村に響き渡る。	風景
2023	凧良ゆう	汝、星の如く	月に一度、私の夫は恋人に会いに行く。	衝撃
2024	宮島未奈	成瀬は天下を取りに行く	「島崎、わたしはこの夏を西武に捧げようと思う。」	セリフ

全体を通して読者の想像を掻き立て物語の世界に引きずり込むような文章が多かった。

最近の作品は昔の作品と比べて一文が短く衝撃を与えるものが多い。これは近年の社会は忙しく本がたくさんあるので冒頭で引き込まないと読んで貰えないからではないかと推測する。

### 3.4 考察

本屋大賞は書き出し小説大賞に比べてセリフから始まるものが多かった。「成瀬は天下を取りに行く」で顕著にみられるがセリフから始まるものは主人公の性格を表すような、キャラクター（キャラ）が濃い場合に使われているように感じる。このことはなぜ書き出し小説大賞でセリフから始まるものが少ないのかという疑問につながる。書き出し小説大賞では2、3文しか書かないので主人公を明確に考えて物語を書くことが難しい。そのためキャラ設定が曖昧なままセリフを書くによくわからないものになってしまう。また濃いキャラを作るのは突飛な発想が必要となり難しい。故に少なかったのだろうと考えた。

小説は書き出し小説大賞とは違い、続きをしっかりと作らなければいけないので、あまりに奇抜すぎるものは後から収取がつかなくなり適していない。

## 4 研究方法3 書き出しに関するアンケート

### 4.1 研究の目的とリサーチクエスチョン・仮説との関係

アンケートを行った理由は、最終的な目標は書き出しを変えることで読者に与える印象を変えることができるのかを明らかにしていくことであるため、アンケートは不可欠だと考えたからである。

### 4.2 研究と分析方法

同じ内容の文章で書き方を変えて、どちらがより惹かれる文章か、半田高校三年生を対象にアンケートを取った。自己紹介または他己紹介、セリフ、衝撃の三つが書き出しにおいて興味を引くと研究1、研究2より分かったので、要素を入れた書き出しと要素を入れていない書き出しを作った。

1・3は「自己紹介」に「衝撃」の要素を入れて書いた。、2は「セリフ」に「衝撃」の要素をいれて書いた。文章は以下のとおり。

1は①、2は②、3は①がより興味を引く文章となるように書いた。

質問番号	選択番号	書き出し
1	①	彼の名前は青木、私の好きな人だ。彼の隣で笑っているのは長田、

		昨日殺したはずの女だ。
	②	私は青木が好きだ。彼と仲のいい長田さんは昨日殺したはずなのになぜか生きている。
2	①	カットチェアに座った彼女の髪をはさみで切る。彼女の髪が落ちていく。彼女はきっと何も知らない。
	②	「油断してるなあ」はさみをケースから取り出す。彼女の髪が落ちていく。カットチェアに身体を委ねた彼女はきっと何も知らない。
3	①	僕は生々しい描写に定評がある推理小説家だ。「さあ、今日も取材だ」とつぶやいて包丁を手を取った。
	②	僕はリアリティ重視の推理小説家だ。今日も取材で人を殺すために包丁をカバンに入れた。

### 4.3 結果

質問番号	選ばれると予想した番号	① を選んだ人の割合 (人数)	② を選んだ人の割合 (人数)
1	①	81%(34)	19%(8)
2	②	55%(23)	45%(19)
3	①	81%(34)	19%(8)

42人に回答してもらった。

こちらが予想していた答えと全く同じ回答をした人は11人だった。

### 4.4 考察

1, 3は狙い通りであったが、2は予想と反する結果となってしまった。

アンケートに回答した人に回答の意図を聞いたところ、どれを選んだらいいか分かりやすかったという人もいたが、「文と文のつながりが分かりにくい」、「『定評』と自分で言う主人公はウザい」など見てほしかった部分と違う部分が気になってしまっている人も多く、実験としてあまりよくなかった。また、文を選んだ理由について書く欄を設けなかったため、なぜその文を選んだのか、はっきりとした理由がわからない点もよくなかった。

そして文章というのは結局主観によるものが多く誰がどの表現に引っかかるかを判断することは難しい。今後実験するときは差をつけたい部分以外の表現は統一したほうがよい。加えて読む層を意識すべきである。万人受けは難しいので焦点は絞るべきである。

## 5 結論と今後の展望

### 5.1 結論

上の3つの研究より現在の書き出しを書く上でのポイントは、簡潔に書く、読者に驚きを与える、読者に想像の余地を与えるの3点である。

長い書き出しは説明的になってしまうので、読者を文章の世界に引き込むことが難しい。だから、できるだけ端的に、わかりやすく驚きを与えることが大切だ。

また、結局いい書き出しかどうかは読み手の主観であるので、読み手がわかっている場合好みに合わせたものを書くのが一番良い。

成果としてはポスターセッションで実際に書くときに試してみたいという意見も多くもらえたことがあげられる。

## 今後の展望

客観的なデータを得るために今回の反省を踏まえつつアンケートを繰り返し実施したい。ターゲットを絞った文章を書くために書籍の読者層についても分析をしたい。

驚きを与えるという部分に関してどのような時に驚きが呼び起こされるのかなどもう少し細かく突き詰めたい。

## 6 謝辞

ご指導いただいた先生はじめ、この研究に協力して下さった皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 7 引用文献・参考文献

### 引用文献

- 天久聖一（2024）。「書き出し小説大賞 282 回秀作発表」。  
<https://dailyportalz.jp/kiji/kakidashi282/page/2>. 2024年8月19日.
- 天久聖一（2024）。「書き出し小説大賞 283 回秀作発表」。  
<https://dailyportalz.jp/kiji/kakidashi283>. 2024年9月17日.
- 天久聖一（2024）。「書き出し小説大賞 286 回秀作発表」。  
<https://dailyportalz.jp/kiji/kakidashi286/page/2>. 2024年12月16日.
- 天久聖一（2025）。「書き出し小説大賞 287 回秀作発表」。  
<https://dailyportalz.jp/kiji/kakidashi287/page/2>. 2025年1月20日.
- 天久聖一（2024）。「書き出し小説大賞 289 回秀作発表」。  
<https://dailyportalz.jp/kiji/kakidashi289/page/2>. 2025年3月17日.
- 天久聖一（2024）。「書き出し小説大賞 291 回秀作発表」。  
<https://dailyportalz.jp/kiji/kakidashi291/page/2>. 2025年5月19日.
- 和田竜（2013）。「村上海賊の娘」.新潮社
- 上橋菜穂子（2014）。「鹿の王」.KADOKAWA
- 宮下奈都（2015）。「羊と鋼の森」.文藝春秋
- 恩田陸（2016）。「蜜蜂と遠雷」.幻冬舎
- 辻村深月（2017）。「かがみの孤城」.ポプラ社
- 瀬尾まいこ（2018）。「そして、バトンは渡された」.文藝春秋
- 凧良ゆう（2019）。「流浪の月」.東京創元社
- 町田そのこ（2020）。「52 ヘルツのクジラ」.中央公論新社
- 逢坂冬馬（2021）。「同志少女よ、敵を撃て」.早川書房
- 凧良ゆう（2022）。「汝、星のごとく」.講談社
- 宮島未奈（2023）。「成瀬は天下を取りに行く」.新潮社

### 参考文献

- 戸梶亜紀彦（2001）「感動喚起のメカニズムについて」.『認知科学』, 8(4) 360-368
- 矢崎慶太郎（2013）「社会システム理論における芸術の社会的機能—なぜ人は芸術に参加するのか」.『年報社会学論集』, (26) 183-194